質的心理学研究　第20号臨時特集／2021／No.20／S118–S124

盲ろう者にマルチモダリティを伝える指点字通訳者のワーク

坂井田瑠衣　公立はこだて未来大学システム情報科学部
SAKAIDA Rui　School of Systems Information Science, Future University Hakodate
坊農真弓　国立情報学研究所情報社会相関研究系[1)]
BONO Mayumi　Information and Society Research Division, National Institute of Informatics

要約
本論文では，盲ろう者が指点字通訳を介して相互行為に参加する場面において，いかにして指点字通訳者が盲ろう者に対話相手の発するマルチモーダルな情報を伝えているかを報告する。指点字とは，盲ろう者が他者と対話するために用いられるコミュニケーション方法の一つである。指点字通訳者は，視聴覚的な資源にアクセスできない盲ろう者に対して，対話相手の発話内容だけでなく，対話相手やコミュニケーション状況に関するさまざまな情報を伝えている。本論文では，対話相手の相槌，頷き，笑い，指さしといったマルチモーダルなふるまいから発せられる情報が，いつどのように指点字通訳者によって盲ろう者に伝えられるのかを，盲ろう者の福島智氏が参加した相互行為の微視的な観察によって報告する。指点字通訳者は，対話相手の発するマルチモーダルなふるまいを盲ろう者の手に集約して伝えることで，盲ろう者が対話相手の発話や反応を理解することに貢献していることが示唆される。

キーワード
指点字通訳，盲ろう者，相互行為，マルチモダリティ

Title
Finger Braille Interpreters' Work of Communicating Multimodality to the Deafblind

Abstract
This paper reports how finger braille interpreters communicate multimodal information to the deafblind. Finger braille is a mode of communication that is used by and for deafblind people. Finger braille interpreters convey not only the content of an interlocutor's utterances but also various behavioral and environmental information. Focusing on finger braille interpretation for Dr. Satoshi Fukushima, a deafblind man, we observed when and how interpreters communicate the multimodality of the interlocutor's behavior, such as acknowledgment, nodding, laughter, and pointing gestures. The results suggest that multimodal information, which the interpreters convey through the deafblind person's hands, can help the deafblind person understand the essence of the interlocutor's remarks.

Key words
finger braille interpretation, deafblind, social interaction, multimodality

はじめに

本論文では，盲ろう者が指点字通訳を介して相互行為に参加する場面において，いかにして指点字通訳者が盲ろう者に対話相手の発するマルチモーダルな情報を伝えているかを報告する。

指点字とは，視聴覚に障害のある盲ろう者が他者と対話するために用いられるコミュニケーション方法の一つであり，主に視力を失った後に聴力を失った人々，および健常の状態から比較的短期間に盲ろうになった人々によって用いられる[2)]。指点字は点字から派生しており，受け手の両手を点字タイプライターの6つのキーに見立て，左右の人差し指，中指，薬指に点字を打つ要領で文字を伝達する（図1，左）。

指点字通訳[3)]とは，指点字を使える盲ろう者と指点字を使えない人々，あるいは指点字は使えるが物理的に離れていて盲ろう者の手に触れられない人々が対話するために，指点字通訳者によって行われるコミュニケーション支援の実践である（図1，右）。指点字通訳者は，視聴覚的な資源にアクセスできない盲ろう者に対して，対話相手の発話内容を一字一句伝えるだけでなく，対話相手やコミュニケーション状況に関するさまざまな情報を伝えている。なかでも対話相手が産出するマルチモーダルな資源，すなわちマルチモダリティがしばしば盲ろう者に伝えられる[4)]。

マルチモダリティとは，「身振り，視線，表情，姿勢，身体動作，さらには韻律，語彙，文法など，参与者たちが行為を組織するために用いる多様な資源」のことを指す（Mondada, 2016, p.338; 日本語訳は筆者らによる）。相互行為においてマルチモダリティが重要な役割を果たしていることが知られているが（Goodwin, 1981; Heath, 1986; Mondada, 2016），盲ろう者は対話相手から視覚的および聴覚的に産出されるマルチモーダルな情報のほとんどを自ら得ることができない。そのため，たとえ指点字で対話相手の発話を伝達されても，相手の発話の意図を正確に理解したり発話の背景を把握したりすることが困難な場合もある（福島，2011）。

指点字通訳の実践においては，いかなるマルチモーダルなふるまいが，いつどのように伝達されているのだろうか。これまでの盲ろう者の相互行為研究は，触手話対話（Iwasaki, Bartlett, Manns, & Willoughby, 2019）や触手話通訳（Raanes & Berge, 2017）を扱ったものがほとんどである。指点字通訳場面の相互行為研究は始まったばかりであり（坊農・福島，2020），とりわけ指点字通訳者がマルチモーダルな情報を伝達する過程はほとんど明らかになっていない。

本論文の目的は，指点字通訳者が盲ろう者に対して，いかなるマルチモーダルなふるまいを，いつどのようにして伝えているのかを，相互行為の映像データの微視的な観察をもとにして報告することである。指点字通訳者がマルチモダリティを伝えるという実践が，いかにして盲ろう者が対話相手の発話や反応を理解することに貢献しているかを検討する。

データと方法

本論文において観察する映像データは，9歳で視力を，18歳で聴力を失って全盲ろうとなり，日常的に指点字を介して他者とコミュニケーションしている東

図1　指点字のしくみ（左）と指点字通訳の様子（右）

京大学教授・福島智氏と，晴眼かつ健聴の対話相手1名による約2時間18分の対談である。対談は2015年1月に東京大学の福島研究室において実施され，2名の晴眼の指点字通訳者が交替で福島氏の指点字通訳を担当した。2名の通訳者はいずれも日常的に福島氏の通訳・介助業務に従事しており，指点字を打つスピードや正確さは福島氏からも高く評価されている。収録に先立ち，対談の参加者全員から，映像に収録されること，収録された映像が分析に使用されることへの同意を得た。また福島氏には実名および顔写真，2名の通訳者には顔写真が掲載されることへの同意を得た。

指点字通訳者が対話相手のマルチモーダルなふるまいを伝えている事例を4つ抜粋し，エスノメソドロジー・会話分析で用いられる転記方法によって詳細に観察する[5)]。事例1，2，3では同じ通訳者，事例4ではもう1人の通訳者が通訳を担当している。通訳者の身体的ふるまいの行に書かれた仮名文字は，通訳者が福島氏の手に打点した文字を示す。

相槌・頷きの伝達

後天的に失聴した福島は声を出して発話することができるが，その発話が受け手に届いているかを直接確認することはできない。そこで，事例1において指点字通訳者は，左手3本の指で福島の左手3本の指（1，2，3の点；図1，左）を軽くタップする（以下，123タップと呼び，転記では「123」と表記する）ことで，対話相手の相槌や頷きを伝える。

事例1

1　福島　ただ:, (0.8) それを繰り返す中で:,
2　相手　ん: *ん.
　通訳　　*123
3　　(0.8)
4　福島　微妙な, 揺れが生じ＋たり:, (0.1)+(0.1)
　相手　　＋頷く　　+頷く
5　相手　*んん.＋
　　+頷く
　通訳　*123
6　　(0.2)*(0.2)+(0.1)
　相手　　+頷く
　通訳　　*123
7　福島　*表現の: (0.6) がずれていたり.
　通訳　*123

まず，指点字通訳者が対話相手の反応を福島に伝えるタイミングに注目したい。対話相手が「ん : ん .」や頷きによって反応すると，指点字通訳者は素早く福島の左手をタップし，その反応を伝える（2，5～7行目の通訳）。福島に対話相手の反応を伝えるタイミングが遅れると，福島には対話相手が「間の悪い」タイミングで反応しているとも認識されかねない。指点字通訳者は，対話相手の反応を注意深く観察しており，それを素早く福島に伝えていることがわかる。

次に，指点字通訳者がどのように相槌や頷きを伝えるかを見たい。指点字通訳者は，123タップで対話相手の相槌や頷きを伝えている。指点字通訳では，左手の3指で123を同時にタップする[6)]ことで対話相手の反応を伝えることが慣習化されている（坊農・福島，2020）。

事例1において見られる対話相手の相槌や頷きは，いずれも発話の受け止めを示している一方，それ以上の情報を特にもたらしているわけではないという点で最小限な反応である。そのことは指点字通訳者が反応を福島に伝える方法にも反映されている。つまり片手の3指を1回同時にタップするという単純な方法が用いられることで，対話相手が最小限の反応を示していることが福島にも簡潔に伝わるように工夫されている。

さらに，言語的な相槌（例えば2行目）と非言語的な頷き（例えば6行目）が，いずれも123タップで伝えられていることも重要である。それらは声音と頭部動作という別のモダリティによって産出されているが，指点字通訳者はいずれの反応も同等な機能，すなわち発話の受け止めの表示を意味するものとして理解し，同じ表現方法で伝達している。

事例2では，事例1とは異なる意味内容の相槌が福島に伝えられる。

事例2

1　福島　2人の通訳者が替わる, ご＋とに
　相手　　+頷く
2　　印*象は+若干*変わるんですが [:,

3　相手　　[+へ*え+::=
　相手　　+頷く　　+頷く +頷く
　通訳　*123　　*123　　*123
4　相手　=[:::
5　福島　[でも*+言語,*+その+ものは,
　相手　　+頷く +頷く+頷く
　通訳　　*へ　　*ー

福島が「若干変わるんですが」と言い終えたところで（2 行目），対話相手は連続して頷きながら「へえ :::::」と反応する（3，4 行目）。この反応は，ニュースの受け取りを示すトークン（news-receipt token; Mori, 2006）であり，それまで知らなかった情報を受け取ったことを示している。

対話相手が頷きながら「へえ」と発話し始めた直後，指点字通訳者は，まずは事例 1 と同様に 123 タップで福島に伝えるが（3 行目末尾の通訳），その後「へー」と打点する（5 行目の通訳）。指点字通訳者は対話相手の相槌を文字通りに伝えることで，それが事例 1 のような最小限の反応ではなく，「へえ」というニュースの受け取りを示すことを伝えている。

事例 1，2 において，福島は指点字通訳者を介して対話相手の反応を受け取りながら，さらなる発話産出を続けている。このことは，福島が発話を対話相手に届けることにとりわけ問題を認識していないことを意味する。福島は指点字通訳者から相槌や頷きを伝えられることで，自らの発話が対話相手に届いていることを確信するための手がかりを得ることが可能になっている。

笑いの伝達

事例 3 では，対話相手の笑いが福島に伝えられる。

事例3

1　福島　(>だけど<)姿は僕には見えないわけです
2　　けれど[も
3　相手　　[ん*:ん.
　通訳　　*123
4　福島　*あの:, ○○さん((対話相手))っていう人は
　通訳　*123
5　　いらっしゃる.=[で,
6　相手　　[う:ん.
7　　(0.2)*(0.4)
　通訳　　*123
8　福島　僕の前方向に存在し,
9　　+してい[る.
10　相手　　[hh* +.h *hehe
　相手　+頷く　　+頷く
　通訳　　*123 *ふ ふ ふ
11　福島　*で, hh .hh (0.5) その:,
　通訳　*ふ ふ((小刻みに繰り返す))

福島の発話に対して，対話相手は「ん : ん .」（3 行目）などの相槌や頷き（10 行目）に加えて，「hh .h hehe」と笑うことで反応する（10 行目）。

この対話相手の笑いが福島に伝えられるタイミングを見ていこう。事例 1，2 の相槌や頷きと同様，ここでの対話相手の笑いも，産出された直後のタイミングで福島に伝えられている。対話相手が「hh .h」と笑い始めると（10 行目），指点字通訳者は即座に「ふふふふふ」と打点する（10，11 行目の通訳）。

次に，対話相手の笑いがどのようにして福島に伝えられるかに注目したい。指点字通訳者は，「ふふふふふ」と打点することで，対話相手の笑いを福島に伝えている。しかし，実際の対話相手の笑いを聞いてみると，「ふ」という音は聞き取れない。この笑いを呼気音と吸気音の記号を用いて転記すると，「hh .h hehe」となる（日本語で転記するのは難しいが，あえて表記するなら「うー，へへ」のようになる）。

ここで指点字通訳者は，日本語で笑いを表記する際に用いられる慣用的なオノマトペとして「ふふふふふ」という文字表現を用いている。事例 1 において相槌が文字通り伝達されていなかったのと同様に，事例 3 においても，指点字通訳者は，笑いの詳細な音声的特徴を伝えるのではなく，慣用的な笑いの文字表現を用いている。すなわち，対話相手の反応が「笑い」であるということが簡潔に伝わる表現になっている。

聞き手の笑いは話し手の発話に対する理解を示す反応として重要である。聞き手は話し手の発話に対して笑うことで，話し手の表現した感情的態度（affective stance）を支持することを示すことができる（Lindström

& Sorjonen, 2013)。福島は，指点字で対話相手の笑いが伝えられ始めた直後に「で ,」と次の発話を続けようとするが（11 行目），その直後，自らも笑い声を産出する（11 行目，「hh .hh」）。この福島の反応からは，対話相手が福島の感情的態度を支持したことを福島自身が理解したことがわかる。このように，指点字通訳者が笑いを伝達する実践は，福島が他者との間で感情的態度を共有するための基盤となっている。

指さしの伝達

事例 4 では，対話相手の指さしが福島に伝えられる。

事例 4 [7)]

1　相手　°えっと°*+ちょっとこ+*の:: きかいに
　　+.....+機器を指さす-->
　　通訳　　*　{ですけど}　*ちょっと ((不明))
2　　つ い+て*お+聞き:したいんですけど::,
　　-->+,,,,,,,,,+
　　通訳　　*このきかいに　と つ　つい
3　　(0.3)*(0.2)
　　通訳　　*て
4　相手　+こ*の::+ (.) 先#ほどおっしゃってた
　　+.....+機器を指さす-->
　　通訳　　*お き き　む　し　　たい
　　図　　#図2, 左
5　　ゆび*てんじの, (.) タイプライター .
　　通訳　　*ん{ですけど}さ き　　の
6　　(0.1)*(0.4)+(1.6)
　　相手　　-->+,,,
　　通訳　　*どの{指点字}のたいぷら
7　相手　*これは: *あ#の*:$::
　　通訳　*い たー
　　通訳　　*福島の左手を機器に向ける*
　　福島　　$頷く
　　図　　#図2, 右

事例 4 では，対話相手が指さしを 2 回産出している（1，2 行目と 4-6 行目の相手）。福島が一連の発話内容を正確に理解するためには，対話相手が，「この」という指示詞にともなって，福島と対話相手の間に置かれた機器に右手の人差し指を向けていることを認識する必要がある。

指点字通訳者は，一連の発話の伝達（1-7 行目の通訳，タイプミスおよび明確に転記できない打点が含まれている）に区切りがついた位置で，対話相手の指さしを福島に伝える（7 行目の通訳）。「たいぷらいたー」と伝達した直後，福島の左手を軽く持ち上げ機器が置かれている方向に向ける（図 2，右）ことで，指点字通訳者は左手を向けた方向に何らかの注意を向けるべき対象が存在していることを示している。指点字通訳者が福島の左手を機器の方向に向けた直後，福島は頷く（7 行目の福島）。ここで福島は指点字通訳者によって左手を向けられたことに対して受け取りを示し，またその意味を理解したことを示しているように見える。

他の事例とは異なり，事例 4 では指さしの産出のタイミングと伝達のタイミングが大きく（約 9 秒ほど）離れている。これは，対話相手の発話に区切りがつく

図2　対話相手による指さし（左）と指点字通訳者による指さしの伝達（右）

まで指さしを伝達できるタイミングがなかったためだろう。指さしのように発話と共起するふるまいは，指点字通訳においては発話内容と同時に伝えられないという制約がある。そうした制約の下で，指点字通訳者が対話相手の発話に区切りのついたタイミングを見計らい，その指さしを遅れて伝えることで，福島は対話相手の身振りを伴った発話を正確に理解することが可能になっているのである。

議　論

本論文では，盲ろう者の福島智氏が参加した相互行為において，対話相手が産出するマルチモーダルなふるまいが指点字通訳者によっていつどのように伝えられるかを詳細に観察してきた。

事例 1，2，3 のように，対話相手が聞き手として福島氏の発話に反応している時には，指点字通訳者は対話相手の反応が産出された直後の位置で福島氏に伝えることで，福島氏がその反応を素早く認識することを可能にしていた。そうした「聞き手性の表示」（Goodwin, 1981）を構成する反応が指点字を介して伝えられることは，福島氏にとって自らの発話が聞き手に届いていることを確信するための手がかりとなっていた。

他方, 聞き手の反応には, 語彙的な応答（e.g.「へえ」）や笑いといった，聞き手性の表示だけにとどまらない意味を持つものもある。指点字通訳者は，それらを文字通りに伝えたり（事例 2），慣用的なオノマトペで伝えたりする（事例 3）ことで，対話相手の反応が含む意味の豊かさ（meaningfulness）を福島氏が理解することを可能にしていた。

また，事例 4 のように対話相手が話し手として発話している時には，指点字通訳者は発話とともに産出される指さしを伝えることで，福島氏が対話相手の産出する発話のマルチモーダルな全体（Mondada, 2016）を理解することが可能になっていた。

このような熟練の指点字通訳者による実践は，福島氏が対話相手の発話や反応を適切なタイミングで正確に理解することを可能にしている。福島氏自身も「文字どおりの発言の通訳だけでなく，その発言がなされた背景や周囲の状況や前後の文脈を示す補足説明が重要だ」（福島，2011，p.295）と述べ，指点字通訳におけるマルチモーダルな情報の重要性を示唆している。こうした個別的な事例の詳細な観察によって，いわゆる「情報保障」とよばれる実践が，いかなる相互行為として具体的に実現されているかを明らかにしていくことができるだろう [8)]。

注

1）総合研究大学院大学複合科学研究科の所属を兼ねる。

2）聴力を失った後に視力を失った人々や先天的盲ろうの人々は, 手話を触ることで読み取る触手話を用いることが多いようである。

3）指点字通訳は二言語間の「通訳」ではないが, 当事者たちによる表現にならい（福島, 2011）, 本論文でも「通訳」と表現する。

4）実際には視覚障害のある指点字通訳者も活躍しており, 彼らは盲ろう者に視覚的な資源を十分に伝えることはできないが, 本論文は晴眼の指点字通訳者の優位さを主張するものではない。

5）使用する転記記号を以下に示す。音声発話（黒色の文字で書かれた行）について,「[」は重なりの開始時点,「=」は発話の密着,「(言葉)」は聞き取りが確定できない発話,「(0.0)」は無音区間の秒数,「(.)」は短い無音区間,「言葉::」は音の引き延ばし,「h」は呼気音,「.h」は吸気音,「言葉̲」は強調を伴い末尾が少し上がって区切りがつく箇所,「° 言葉°」は小さい音声,「.」は下降音調,「,」は継続音調,「> 言葉<」はスピードが速い発話,「(( ))」は注記を示す。身体的ふるまい（灰色の文字で書かれた行）について,「$」は福島氏のふるまいの区切り,「+」は対話相手のふるまいの区切り,「*」は指点字通訳者の伝達・ふるまいの区切り,「...」はふるまいの準備,「,,,」はふるまいの撤退,「+-->」はふるまいが行をまたいで継続すること,「-->+」はふるまいが同一記号まで継続すること,「#」は図の位置を示す（Mondada, 2016）。

6）状況によっては右手の3指（4, 5, 6の点）が同時にタップされる。

7）指点字において慣習化された略字が使われている部分を「{　}」で示す。例えば「{ですけど}」は,「4, 6」と打ってから「け」と打つ。

8）他方で, そうした「保障」が不足している人々, またその「保障」の必要性が十分に認識されていない人々がいることも事実である。

引用文献

坊農真弓・福島智 (2020) 研究者×当事者――福島智の世界とのつながりかた. 認知科学, *27*, 123-137.

福島智 (2011) 盲ろう者として生きて――指点字によるコミュニケーションの復活と再生. 明石書店.

Goodwin, C. (1981) *Conversational organization: Interaction between speakers and hearers*. New York: Academic Press.

Heath, C. (1986) *Body movement and speech in medical interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.

Iwasaki, S., Bartlett, M., Manns, H., & Willoughby, L. (2019) The challenges of multimodality and multi-sensoriality: Methodological issues in analyzing tactile signed interaction. *Journal of Pragmatics, 143*, 215-227.

Lindström, A., & Sorjonen, M. (2013) Affiliation in conversation. In J. Sidnell & T. Stivers (Eds.), *The handbook of conversation analysis* (pp.350-369). Hoboken, NJ: Wiley-Blackwell.

Mondada, L. (2016) Challenges of multimodality: Language and the body in social interaction. *Journal of Sociolinguistics, 20*, 336-366.

Mori, J. (2006) The workings of the Japanese token *hee* in informing sequences: An analysis of sequential context, turn shape, and prosody. *Journal of Pragmatics, 38*, 1175-1205.

Raanes, E., & Berge, S. S. (2017) Sign language interpreters' use of haptic signs in interpreted meetings with deafblind persons. *Journal of Pragmatics, 107*, 91-104.

謝　辞

データの収録と転記にご協力いただいた方々，有益なコメントをいただいた査読者および担当編集委員の先生方に感謝いたします。本研究はJSPS科学研究費17KT0065の助成を受けたものです。

（2021.7.2 受稿，2021.10.8 受理）